【354】

氏　名（本籍）	新　保　邦　寛（東 京 都） しん　ぼ　くに　ひろ
学 位 の 種 類	博　　士（文　　学）
学 位 記 番 号	博　乙　第　2100　号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	**明治三十年代文学のコスモロジー**

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	芳　賀　紀　雄
副　査	筑波大学教授		犬　井　善　壽
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	松　本　　肇
副　査	筑波大学教授	D.L.	川那部　保　明
副　査	筑波大学名誉教授	文学博士	平　岡　敏　夫

論 文 の 内 容 の 要 旨

明治三十年代の日本近代文学は，その近代文学としての成立期である二十年代と日露戦後の四十年代という，研究の対象が比較的明瞭な前後の時代とは異なって，文学史上はもとより文化的社会的にも種々の事象が混在している。本論文は，この明治三十年代の文学を，初頭の国木田独歩から田山花袋・泉鏡花ほかの作家にも言及しつつ，島崎藤村『破戒』に至るまでを展望し，なおかつ同時代の文化的社会的事象に踏み込んで，その文学世界を明らかにしようと試みている。

本論文の章節と要旨は以下の通りである。

第１章「国木田独歩論Ⅰ」は，明治三十年代を作家として生きた国木田独歩を取りあげ，その文学的な営為を通時的に整理する。1「＜小民史＞の行方・＜社会＞への眼差－独歩文学を貫くもの（1)」では，＜詩＞から＜小説＞へという三十年代の大きなうねりが，独歩についていえば，＜人間＞そのものを主題化し＜他者＞を描く文学を目差すに至ったと論じ，また＜他者＞を描く座標軸を措定する必要上，社会認識を深めていったことが，結果として自然主義文学へ接近せしめた点を明らかにしている。2「二人の＜私＞・もう一つの＜小民史＞－独歩文学を貫くもの（2)」では，同時代の＜ノイエ・ロマンティック＞の思潮の影響下にある独歩が，自己省察を深めるなかで人間に対する理解をも深め，その結果，四十年代の文学において顕在化する＜深層的人間＞を先駆的に捉えていたと論ずる。

続く第２章「国木田独歩論Ⅱ」は，独歩の営為を主として共時的に捉える。1「武蔵野」の周縁－藤村にふれて」は，独歩の文学的出発に際して書かれ，＜自然文学＞なる既存のジャンルとは別の「武蔵野」が，三十年代初頭の文壇，すなわち近代的紀行文や写生文が登場し，＜田園文学＞が提唱される情況を受けとめた作品であることを，藤村の『千曲川のスケッチ』といった類似の試みを視野に置きつつ論ずる。2「『忘れ得ぬ人々』から「忘れえぬ人々」へ」では，＜風景＞から＜人間＞へという創作主体の関心の変容そのものが，＜詩＞から＜小説＞へというジャンルの更迭を促す理由であったことを主題化した作品として，「忘れえぬ人々」を分析する。さらに，独歩の文学的営為を通時的に整理するために不可欠な執筆時期の問題と，同時代の多

様な文化的社会的問題を見据えたのが，以下の論述である。3「「春の鳥」－執筆時期問題と＜白痴教育＞」は，近代の＜白痴教育史＞と密接な関係を持つ作品であることを論証し，4「ある小説の運命－＜教育小説＞論争の中の「富岡先生」」では，＜ニーチェ主義＞すなわち＜本能満足主義＞の台頭を危機的情況と見做す＜道徳主義＞陣営や教育界の動向に，独歩の「富岡先生」も呑み込まれてゆく事態を明らかにする。また5「「第三者」再評価－花袋と＜足尾鉱毒事件＞にふれて」では，盟友田山花袋の＜足尾鉱毒事件＞に対する批判意識を明示し，それが独歩の「第三者」に刷り込まれてゆく様相を指摘する。いずれも，独歩の小説を共時態として考察するものであり，それによって作品の秘められたイメージを可視化し，ひいては三十年代文学に対する認識の拡大に繋がるとする。

第3章「明治三十年代文学論Ⅰ」は，三十年代の作品に共通して見出せる文化的社会的な問題を通時的に整理し，同時代の文学的課題を可視的なものとするための論である。1「＜郊外＞像の発見にそって」は，三十年代の東京に焦点を当て，近代都市像が明瞭になるにつれその周縁に都市でも農村（田園）でもない第三の場としての＜郊外＞が生成されてゆき，そこに新しい文化が誕生する様態を，主として文学作品を通じて捉え，さらにその＜郊外＞を解釈の基盤としつつ明治末の主要な作品の読み替えを企てたものである。続く2「車窓の風景・＜眼＞の解放」では＜汽車＞を取りあげ，その＜汽車＞が新しい生活空間の登場であったがために人々の日常的感覚に変革をもたらし，風景観まで変容せしめるに至ったこと，そうした事態が同じく三十年代に生じたことを多くの文学作品を通じて検証し，あわせて現在では放置されている小説の再評価をも促す。また3「＜男三郎事件＞の波紋といわゆる＜癩文学＞と」では，＜癩病＞が正体不明の病気であったがため隠喩化され，文学表現としてだけでなく作品の主題語として流通する過程を明らかにするものだが，隠喩化という事態を決定づけたのは，三十年代の＜遺伝＞観念の流行や＜癩病＞に纏わる迷妄を社会的に認知させることになった＜野口男三郎事件＞であったと論ずる。また同時期に大きく取りあげられた被差別部落問題と癩病患者に対する差別とが相通性を持つことをも指摘する。さらに4「制度としての＜青春＞」では，＜青春＞が，次世代の育成を目的とした近代家族や学校制度の登場によって生成された歴史的概念であり，それが社会的文化的に確立するのが三十年代後半だったことを論じ，とくに藤村の文学を育んだものである点を明確に示す。

第4章「明治三十年代文学論Ⅱ」も前章と同じ姿勢を貫くが，さらに明治文学全体に亘る主題と方法の問題についても論及する。1「鬼か獣か，そして＜アンクル・トム＞へ－近代日本国家成立期の文学テキスト中の中国人－」は，近代日本人の自意識を照射することにもなる中国人差別が，文学作品では逆にそれまでの差別が霧散したかのように見える事態を指摘し，実はそれこそが中国人の主体性を一切認めない根深い差別であったと論じたものである。続く二篇はその方法を作品研究に応用しつつ，作品に刷りこまれた同時代性をより可視化しようとする試みである。2「＜遠近法＞の時代－森林幻想と「高野聖」と－」は，鏡花の『高野聖』を取りあげ，同時代の＜山人＞幻想，＜心理学＞言説，神話や人類学などの文化的背景をいわば概念枠としつつ新たな解釈として導入し，その結果，独歩・花袋の文学との同時代性を浮き彫りにするのみならず，三十年代に登場する柳田国男の＜民俗学＞や＜比較神話学＞のような近代の学問と類縁性を持つ脱領域的な作品であることをも明らかにする。また3「＜文学と科学の調和＞の時代－「田楽豆腐」をめぐって－」は，この近代文学特有の課題が三十年代の文壇の話題をさらった点について，それがいかなる文学的達成をもたらしたかという方向性を探る論である。すなわち＜文学と科学の調和＞なる議論が，同時代の小説に近代自然科学の主流であった植物学との相関性を持ち込んだ事態を論証し，さらにその延長線上に森鷗外「田楽豆腐」の如きすぐれて二十世紀的な文学，ジャンルの垣根が取り払われ，＜三越文化＞までをも含む脱領域的な作品が成立することを示唆している。

第5章「明治三十年代文学論－島崎藤村の場合－」は，三十年代の文学を担ったもう一人の作家，藤村を論ずる。1「二重写しの＜風景＞・そして＜実の世界＞へ－「詩文集」という制度から」は，『一葉舟』と『落

梅集』が＜詩文集＞の体裁を取る点に注目し＜詩＞から＜小説＞へと変わる事態を明らかにしたものだが，やはり藤村の＜詩＞が孤独な＜旅人＞の心象風景に過ぎず，独歩の「忘れえぬ人々」と重なる面があること，また，＜小説＞は藤村にとっても＜人間＞そのものに迫るジャンルであったが，＜小説＞の担い手たるために＜旅人＞たることを止めねばならなかったのは，その詩の性格ゆえであることを，同時代の文壇情況を考慮しつつ論ずる。続く2「「千曲河畔の物語」－＜野獣のような＞ものから＜生活者＞へ」では『破戒』に先行する『旧主人』以下の五作品を検討する。藤村の＜人間＞認識は，当初＜ニーチェ主義＞や＜ゾライズム＞などの流行の観念の影響下にあったが，次第に＜風土＞＜社会＞のなかの具体的存在を目差すに至る。つまり独歩に同じく，＜人間＞を措くための＜座標軸＞に対し自覚的になってゆくと考えられ，それが『破戒』のようなすぐれた社会小説執筆に繋がった。またこれらの五作品は，＜他者＞に迫る部分と＜私＞を問う部分が常に緊張関係を生み出している点に特徴があり，それが藤村の人間観の深まりをもたらす点で独歩に親近しているとする。藤村と独歩は，私生活上の交渉はほとんどなかったが，文学上同じ歩調を取っていたと捉えたうえで，3「『破戒』とその周縁―＜社会＞・＜宗教＞・＜教育＞」では，一方で＜他者＞と＜私＞の認識の深化を受けとめ，他方で三十年代の文化的社会的問題を取り込むという『破戒』を，独歩から始まる明治三十年代文学の総決算として位置づけうると結論する。

審 査 の 結 果 の 要 旨

日本近代文学史において，＜明治三十年代文学＞として取り立てて文学史的な位置づけを与えるということの意義は，二十年代と日露戦争後の四十年代との文学については，研究対象が比較的明瞭で研究の蓄積も多く，そのはぎまの三十年代が文学史的にはもとより，文化的社会的事象においても，研究上困難な様相を呈しているからである。著者は，その点に慎重に配慮しつつ，国木田独歩の「武蔵野」で始まった＜明治三十年代文学＞を島崎藤村の『破戒』で終わると見通す＜通時態＞的な捉え方，三十年代の文化的社会的文脈のなかに作家と作品を位置づける＜共時態＞的な捉え方をもって論文全体を構成している。本論文において高く評価されるべきは，その観点から三十年代の文学を単純に図式化せず，あくまで精緻な作品分析を積み重ねて論を構築する姿勢を貫こうとしている点である。事柄については博捜をきわめ，埋没している作品をも多数掘り起こしてこの時代の文学世界の多様性を明らかにした優れた論といえよう。

かくて，本論文は，独歩のいう＜小民史＞の行方，＜社会＞へのまなざしを保持しつつ，たとえば，「武蔵野」の周辺を見渡して，藤村らを射程に入れ，あるいは，＜郊外＞像の発見，＜汽車＞の登場による風景観の変容にそって，同時代の文学世界について鋭く柔軟に論及している。＜野口男三郎事件＞から＜癩文学＞へ，学校制度から＜青春＞の概念生成へ，さらには，独歩の「武蔵野」から藤村の『破戒』へと，その考察の展開と論及は，新見に満ちており，きわめて魅力的である。

なお，本論文において注目すべきは，明治三十年代の文学の世界を，たんに三十年代の枠のみにとどめず，明治文学全体のなかで捉える内容を含んでいることである。第4章がそれで，この章では，近代日本国家成立期の文学のなかの中国人像に及び，＜遠近法＞の時代，＜文学と科学の調和＞の時代を指摘して，明治三十年代の文学の世界を，柳田民俗学をも動員しつつ，森林幻想，文学の植物学への越境など，かつてない空間へと導いている。

以上の考察をもってして，はじめて『明治三十年代文学のコスモロジー』と題される所以だが，ただし，著者が本論文の序章においてもいうように，いまだに指標となるべき明治文学史を持つに至っていない現状からして，その構築に向けてのいっそうの努力が課題として残されていよう。とはいえ，全章に亘ってその論述は高い水準を示していると判断され，とりわけ「国木田独歩論Ⅰ・Ⅱ」は，＜通時態＞＜共時態＞という視点からの論述が見事に融合しており，秀抜である。さらにまた，その独歩の文学的な試みをすべての面

で受け，明治三十年代の文学の総決算として『破戒』を位置づけたことも十分に納得するに足る。著者の，「『被戒』は明治三十年代文学のコスモロジーそのものである」との結論の一節は，今後の当該分野の研究において，きわめて重い意味を持つに相違ない。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。